

雨乃アリア

Aria Ameno

魔王様が

襲撃でほしそらに

こちらを見ている!

もくじ

1	熱血教師、異世界へ……………	5
2	魔王カルミア……………	21
3	はじめてのオシオキ……………	37
4	イキすぎた教育的指導……………	58
5	セリツサの想い……………	79
6	オシオキ禁止!……………	95
7	サキュバス仕込みの奉仕術……………	114
8	魔王様、ピクニックを楽しむ……………	131
9	城下町デート……………	148

10	異世界温泉みだらの湯	171
11	魔王の正義	190
12	つながる気持ち	208
13	ひとつになる夜	228
14	別れ、そして	247
15	幸福な朝に	263
16	愛のオシオキ	272
	エピローグ	294

1 熱血教師、異世界へ

夢にしては現実感がありすぎた。

いや、状況はまるで現実的ではない。

でも、五感のすべてが「これは夢じゃない」と訴えている。

「新しい教育係をお連れしました」

セリッサがうやうやしく言って腰を折る。

「なんだ、本当に連れてきたのか」

ゆっくり玉座へと向かいながら、少女はつまらなそうにこちらを見やる。

「——斗真様^{とうま}、かしずいてください」

「え？ あ、ああ」

セリツサに囁かれ、俺は床へと片膝をつく。

冷たく硬い感触は、間違いなく現実のそれだ。

「斗真様、この方が今日からあなたの主人となる——」

でも、俺は願ってやまない。

「——魔王カルミア様です」

……こんなのは、頼むから悪い夢であってくれと。

＊

——数時間前。

「はあ……」

無念な思いを引きずって歩く俺の背を、夜風が冷たく追い立てる。

(はいはい、とつとと去りますよ、俺は)

校長に説得されて自主的な休職ということだったんは落ち着いたものの

……。

(たぶんこのまま、退職まで追い込まれるんだろうなあ)

生徒への体罰。

現代の学校教育においては許されない行為だ。

かつては「愛の鞭」なんて言って横行してたみたいだけど、時代は変わった。
た。

生徒の肩をちよつと小突いただけでも、すぐさま問題にされてしまう。

もちろん俺だって、五年の教師生活の中で一度だって生徒に手を上げたこと
はない。

でも。

(まさか生徒にハメられるとはな……)

それが何よりもショックだった。

「うっせえんだよ砂堂^{さどう}。熱血ぶってイキってんじゃねえよ」

「先生がどうこうじゃない。自分が何をしたかをしっかり自覚しろ」

脱色した短髪を逆立てた生徒に、煙草の吸殻を突きつける。

「未成年が、それも学校でこんなものを吸って——」

「うるせえな」

勢いよく、顔面に唾が吐きかけられる。俺はこらえてにじり寄る。

「なあ、話してくれよ。何がお前をそうさせるんだ？ 先生にできることが

あれば――」

「うぜえんだよ！」

振り上げられた拳が迫り、俺はとっさにそれを掌で受け止めた。

瞬間、彼はにやりと笑った。

そしてみずから身体をひねり、腕を不自然な方向へねじ曲げる。

まるで俺が彼を無理やり押さえ込んでいるみたいな格好で。

「いてててて！ やめてくれよ砂堂先生！」

その時だった。

――カシヤツ。

「!？」

振り向くと、ドアの隙間から数名の生徒がこっちにスマホを向けていた。

「あーあー、やっちゃまったな砂堂」

「お前、これは……」

「言い逃れできねえぞ？ 写真も動画もおさえてやったからな」

「俺を……ハメたのか……？」

「お前みたいなのは扱いやすくて楽だわ。熱血ぶってるからリアルだしな
すうつと血の気が引いていく。」

「これでおしまいだな。体罰教師の砂堂センセ」

本気で生徒と向き合ってきたつもりだった。

たしかに熱くなりすぎて鬱陶しがられることもあった。

でも、真摯に訴えれば気持ちに通じると思ってた。

(一方的すぎた、のかな……)

自分を笑おうとして、それにすら失敗した。

(ダメだ、少し気を紛らわそう)

平日だけど、休職中だから早起きする必要なんてない。

「バーか……まあ、どこだっついていいか」

目についた店の扉を、俺は迷いなく押し開いた。

＊

ビールを一気にあおって喉を潤し、強めの酒を注文する。

ロックグラスを三杯ほど空にしたところで、やっと気分が落ち着いてきた。

「ふう……」

見回せば、俺以外に客はただひとり。

カウンターの端でカクテルグラスを傾ける異国の美女だけだ。

「だいぶお疲れのようですね」

暇そうなマスターは美女ではなく俺に声をかけてくる。

つまり、彼女は日本語が堪能じゃないんだろう。

「……わかりますか。実は今日——」

それから何杯飲んだのだろう。

酔った勢いで、俺はマスターに何もかもぶちまけた。

生徒の畏にかけられたこと。

あっさりと不良の言い分を信じた校長に休職を言いつけられたこと。

教師たちの誰ひとりとして俺をかばってくれなかったこと。

それで自分が同僚たちにも疎ましがられていたと今さら気づいたこと。

「うわべだけの教育を変えてやろうと教師になったのに……」

グラスを磨くマスターは、あからさまに面倒そうな顔に変わっている。

「やっぱり俺のやり方は時代錯誤なんれすかね、マスター」

「さあ、私にはよくわかりませんが……」

「あーあ、もう辞めるかな。こうなりや教育の世界に未練もねえや」

やけになってグラスをあおりかけたとき、誰かに腕をつかまれた。

「えっ……」

振り向くと、いつの間にか異国の美女が隣にやってきている。

「……………」

「すみません、えっと——」

声が聞き取れず、彼女に顔を近づける。

ふわりと甘い香りがして、湿った吐息が耳に吹きかけられた。

「あなたの考え方、私は共感しましたわ」

「本当ですか！」

美女の賛同を得て、俺は能天気には舞い上がる。

酒のせいもあるだろうけど、単純なもんだ。

「実は、私の勤めている城で次期当主の家庭教師を探しているのですが」

「はあ、そうなんですか」

ん？ 城？ 今、城って言ったのか？ 聞き間違いか。

「もしこの世界に未練がないのなら——」

まあ、学校教育の世界じゃなくても、生徒がいれば教育はできる……。

「我が——……当主——……魔王……——」

酔いで視界が揺らぎ、ふっと意識が遠のきかける。

「いかがです？ 家庭教師、お願いできませんか？」

美女が俺の腕を豊かな胸に抱きしめる。

ごくりと喉を鳴らして、俺は思わず頷いていた。

「よかった。私はセリッサ。どうぞよろしくお願いしますね」

「ど、どうも。砂堂斗真です」

「斗真様。では一緒に——」

引き立てられるようにして椅子から降り、ドアへ向かう。

「さすが教師だけあって外国語が堪能なんですね」

マスターの妙な言葉に首を傾げながら、セリツサとともにバーを出た。

「えっ……?」

外へ出ると、まぶしい陽射しに包まれた。

「嘘だろ、まさか飲み明かすなんて——」

いや、待て。

俺は慌てて振り返る。

さつきまで飲んでいたバーはどこにもない。

それどころか、昼夜の別以前に周囲の景色は一変していた。

「どこだよ、ここは……！」

街を行き交う人々は、どう見ても日本人じゃない。

露店で売られている食べものも知らないものばかりだ。

極めつきは、あきらかに人間ではないモノたちの姿。

映画か絵本で見たようなあれは、「獣人」とでも呼べばいいのか……。

「元の世界に未練はないと仰ったでしょう？」

セリツサは涼しい顔で微笑んだ。

「ここが今日から斗真様が暮らす——新しい世界ですよ」

2 魔王カルミア

「つまりここは……異世界ってこと、なのか？」

「私たちにとっては日本——地球こそが異世界ですけれどね」

セリツサによると、ここは日本じゃないどころか地球ですらないらしい。

「そんな話、とてもじゃないけど——」

信じられない、と言いかけて、やめた。

獣人と人間が会話をしながら通りすぎていくのを見たからだ。

(ここが地球だって言われるほうが信じがたい、よな……)

「つて、いやいやいやいや！」

俺はぶんぶんと頭を振った。

「そんなわけあるか！　こんなもん夢に決まってる！」

「まあ、それが正常な反応でしょうね」

「きつと飲みすぎてバーでつぶれて、それで夢を見てるんだ！」

夢の中じゃそれが夢だとはなかなか気づかないものだ。

でも、こんな突拍子もない夢だったら、さすがにすぐそれとわかる。

「だいたい店を出たら昼間ってのがおかしい」

「時差のようなものです。時空を超えて転移したわけですから」

「そもそも異世界に飛ばされるときつてのはトラックに跳ねられて死んだりとか、そういうきっかけが必要で——」

「私の転移魔法でバーの扉を時空のトンネルとして代用したのです」

「第一セリッサと普通に言葉を交わせる時点でおかしい！」

「斗真様の耳に『通訳の霧』を吹きかけましたので」

「ああ、だからマスターには外国語に聞こえていたのか……じゃなくて！」

「他に何か？」

「じゃ、じゃあアレは——」

「魔法です」

「それならコレは——」

「異世界ですから」

ツツコミどころを思いつくままに投げつけたが、無駄だった。

「魔法とか異世界とか言われたらそこで話が終わっちゃうじゃないか……」

「真実なのですから仕方ないでしょう」

心なしか楽しげなセリツサを睨みつける。

「あくまで夢だと仰るのなら、そのつもりで楽しんでみてはいかがですか？」

「そんな——！」

言いかけて、俺は思い直す。

「いや……それもそうか」

これが夢なら——いや、夢に違いないのだが——それなら目覚めれば終わることだ。

「……やはり熱血漢というのは扱いやすいものなのですね」

「え？　なんだって？」

「いえ、何も。それよりも」

セリツサは遠くを指さした。

「城へと急ぎましょう」

「ほ、本当に城だったのか……」

「着くころには夕食の準備が整うはずです」

「えーと……」

城まではかなりの距離があるように見えるんだけど……。

「ま、魔法であそこまで飛べたりは？」

「おや？ おやおや？」

セリツサが顔を覗き込んでくる。

「魔法とか異世界とかで話を済ませるのはお嫌なのでは？」

「うっ……で、でも夢ならなんでもありだろ！」

「あいにくさきほどの転移で力を使ってしまったもので」

「……歩けと？」

「今日はいいい陽気ですし、酔い覚ましにもなるでしょう」

こちらとら酔いなんてとつくに吹き飛んでしまっている。

「はあ……もう好きにしてくれ」

「ええ、そのつもりです」

俺は肩を落とし、優雅に歩み出すセリツサに続いた。

＊

数時間かけて城へ辿り着くころには、すっかり陽が落ちかけていた。

客用というにはあまりに豪華な食堂で食事をふるまわれ、俺は広間へ通された。

「まさかとは思うんだけど」

「はい、なんでしょう」

俺の生徒となる「次期当主」とやらを待ちながら、訊いてみる。

「俺が教えるのって……お、王子様かお姫様ってことになるのか？」

「まあ……遠からず、というところですね」

おいおい。

異世界だとはいつても、だとしたら作法とか、いろいろ気遣う必要があるんじゃない……。

「あまり難しくお考えになる必要はありませんわ。まだお子ちゃまもいいところですから」

「そうは言ったって現当主の前ではさすがにちゃんとしないと——」

「先代の魔王様は五年前に地獄へと旅立ちました」

「えっ……?」

「ですから、次期ではなく実際にはすでに当主なのです。正式な戴冠はまだですが」

「だったらなおさら——」

「ご心配なく。自由気ままに生きてきた方ですから、本人からして礼儀作法など知りません」

「そこから教育しろ、ってことか」

「ええ。期待しておりますよ、斗真様」

「それなら教育のしがいもありそう——って、え? ちょっと待て」

「おや、おいでになったようですよ」

セリッサはさつき、なんと言った？

聞き間違いでなければ、たしか「魔王様」って……。

確認するより早く、奥の扉が開いた。

「まったく面倒な……」

ぼやきながら姿を見せた当主は——ちんまりした女の子だった。

「えっ？ あのうちっちゃん子が——んぎいっ」

セリッサに思いきり足を踏みつけられた。

(黙っていてください)

無言で威圧されて俺は肩をすぼめる。

「——新しい教育係をお連れしました」

「なんだ、本当に連れてきたのか」

ゆっくり玉座へと向かいながら、少女はつまらなそうにこちらを見やる。

「——斗真様、かしずいてください」

「え？ あ、ああ」

セリッサに囁かれ、俺は床へと片膝をつく。

「この方が今日からあなたの主人となる——魔王カルミア様です」

(嘘だろ……本当に魔王を教育しろってのか?)

「ふん、どうせ長続きするまい」

威圧的な視線に身をすくめかけたが――。

「ぎゅふっ」

目の前で派手にすっ転んだ小さな魔王の姿を見て、途端に脱力してしまう。

「いたた……あつ、おい、お前！」

太腿までめくれ上がったスカートを押さえて、魔王カルミアがこっちを睨む。

「みみみ見たか？ 見たら斬首刑だぞ！」

「い、いえ、見てません。白い下着なんて見てません」

「ふん、そうか。ならばよい」

ぱんぱんとお尻をはたきつつ、カルミアは立ち上がる。

口をすべらせたような気もするが、幸い気づかれていないようだ。

「あの……本当にコレが魔王様なの？」

小声での問いかけに、セリッサも囁きで返してくる。

「ええ、コレでも魔王様なのです」

「こら、何をひそひそやってるんだ」

仁王立ちして薄い胸を張るカルミアは、魔王様にしては迫力がなさすぎた。

「コレに教育を施して魔王としての威厳を与えてやってほしいのです」

「おい、今悪口を言わなかったか？ 許さんぞ、首ちよんぱだぞ」

「うるさいですよ魔王様。今、斗真様と話をしているのです」

「あう……そうだな、すまない——いや、違うだろ！」

「ご覧の有様ですので、厳しい躰をよろしくお頼み申しますわ、斗真様」

夢にしてもハチャメチャすぎやしないか？

(いや、認めたくはないけど……)

セリツサに踏まれた足の痛みが、これは現実なのだとして強く訴えている。

「ふん。せいぜい私の機嫌を損ねて処刑されないように気をつけるんだな」

ぴよこんと俺の前に躍り出て、カルミアはにいつと笑う。

「まあよろしく頼むぞ、せんせー」

3 はじめてのオシオキ

「つまらん！ つまらんつまらんつまらん！」

カルミアは重たい魔導書を軽々と持ち上げて振り回す。

「わあっ！ 危ない！ 危ないから！」

「当たり前だ！ これですんせーの頭をかち割ろうとしてるんだからな！」

もちろん魔王ジョークなのだが、実際危険なので気が気じゃない。

「まったく……いいからほら、早く続きを」

「ちっ、面倒だな……」

——教育係に任命されて一週間ほど経つたろうか。

教えているのは主に歴史、政治、一般常識や礼儀作法などなど。

いずれも城の図書館に資料が揃っていたので、教えることに支障はない。

だけど……。

「なあ、せんせーは教育係である前に城の雇われ人だろう？」

「そうですね」

「だったら私の言うことを聞くのが筋じゃないか？」

「そうですね」

「ならば命じよう。勉強はこれまで。私を解放しろ」

「そうですね」

「おい、なぜ魔導書を私の前に置く」

「次はこのページをやりましょう」

「主の命令だぞ！」

「先生の言うことを聞きなさい！」

「ひゃ、ひゃいっ！」

ぴしゃりと言い放つと、カルミアは背筋を伸ばした。

「い、いやいや、そうじゃなくてだな。だから私は――」

「授業中は先生の言うことを聞く。それが生徒としてのあるべき姿勢です」

俺は魔導書のページを指で示し、書き写すようカルミアに促した。

「この時間は教師と生徒として、はじめをつけて過ごすこと」

「私は魔王なんだぞ？」

「だから授業が終われば命令には従いますよ。でも授業中は関係ない」

不満そうにしながらも、カルミアはノートに呪文を書き写していく。

「授業中は逆に、カルミアが先生の言うことを聞かなくちゃならない」

「でも今までの奴らはなんでも言うことを聞いたぞ。嫌だと言えば勉強は終

わった」

「それじゃあ教師としては失格ですね」

「せんせーだってそのほうが楽だろ？ 楽しんで金をもらえて嬉しいはずだ」
「では、なぜみんな辞めていったと思います？」

「知らん。セリッサが勝手に解雇したんだ。私は気に入ってたのに」

「それは教師としての役目を果たしていなかったからですよ」

首を傾げるカルミアに、ゆっくりと言い聞かせる。

「教師は生徒に勉強を教えるのが仕事です。それができなきゃ解雇は当然――
」。先生は教育係となった以上、授業中はあくまで生徒としてカルミアに接
します」

「カルミアカルミアって、様くらいつけたらどうだ」

「授業の時間以外は魔王様と呼びますよ。でも今は違う。さあカルミア」
魔導書を取り上げ、今度は歴史書を開いて渡す。

「次はここを——」

「むう……せめて休憩くらい入れたらどうだ……」

ぶつくさ言いながらも、カルミアは文章の音読を始めた。

——とまあ、こんな具合で毎日授業中に騒ぐので、手がかかるったらない。

最終的には勉強に戻るのだが、何かしら文句を言わないと気が済まないらしい。

(今までの教育係は解雇されたんじゃないか？)

だからセリツサも、わざわざ異世界である日本まで人材を探しに来たのだ。

(まあいい……そのくらいのほうが教育のしがいがあるってもんだ)

初日の夜のことを俺は思い出す。

*

「かつて日本の教育現場は血と暴力に支配されていたそうですね」

カルミアとの初対面を終えたあと、俺の寝泊まりする部屋へ向かって広い

廊下を歩きながら、セリツサはそんなふうに切り出した。

「はい？」

「逆らう生徒には容赦ない制裁を加え、力で抑えつけて知識を叩き込んだと」

「いや、昔はたしかに多少の体罰はあったみたいだけど、そこまでは——」

「そう、現在はそれが許されず、教師の地位は地に落ちた」

「そんなことは……」

体罰がなくなったのはいいことだ。あるべき姿で、正常なはずだ。

でも、生徒や父兄の発言力が増し、教師が弱体化したのは事実かもしれない。

い。

そう思って、俺ははっきり否定できなかった。

「そんな時代に現れた救世主が——斗真様。あなたです」
「違います」

今度ははっきり否定した。

「少し生徒に齒向かっただけで断罪される奴隷と化した教師たちの中にあつて——」

「ひどい誤解だ」

「恐れずに生徒の腕をひねり上げ、骨を砕いた斗真様」

「腕をひねられたふりをした生徒に陥れられたただけだから」

バーでマスターに話してたのを聞いてなかったのか、この人は。

「あなたならあのじゃじゃ馬——魔王様の教育係にふさわしい」

「待て待て。何から何まで勘違い——」

反論しかけた俺の腕に、セリツサがぴたりと身を寄せてくる。

(いかん、柔らかなものが……)

「ねえ、お願いしますわ。お礼はたっぷりと……ね？」

「い、いや、教育者として、そういうふしだらな報酬は——」

「あら？ 私はお金の話をしているのですが？」

なおも豊かな胸を押しつけながら、セリツサは意地悪く笑う。

「この宝玉を」

胸元に手を差し入れて、そこから取り出したものを俺の手にのせる。

セリツサのぬくもりであたたかい——じゃない、小さいながらも高価そうな宝玉だ。

「日本で試しに鑑定させたら、ひとつで数百万円になるそうです」

「す、数百……」

「それを好きなだけ差し上げますわ。千でも二千でも」

「ということは、日本円で数十億円……？」

「い、いや、金の問題じゃなくて、俺にはとても魔王の教育なんて」

「では自力でお帰りくださいね」

笑顔でとんでもないことを言う。異世界からどう帰れと？

「魔王様の性根を叩き直してくださいれば、元の世界へお戻しします」

「完全に強制じゃないか……」

いや、でも待てよ？

報酬を持ち帰れば一生、生活は安泰だ。

さらには理想の教育を行える学校だって設立できる。

(どうせやらなきゃ帰れないんだ)

だったらいいじゃないか。

くすぶっていた教育魂に再び火がともる。

いいか、あの子は恐ろしい魔王なんかじゃない。

ひとりのかわいい生徒だ。俺の生徒だ。

ならば教師たる者、真摯に、全力で向き合い、正しい道に導こう。

「引き受けてくださいますね？」

俺は力強く頷いた。

＊

——最初はそう思っていたのだ。

異世界とはいえ、生徒と教師、一対一で向き合って自分の信じる教育を施す。

そうすれば失っていた自信を取り戻すことにもつながるだろうと。

でも——思っていた以上にカルミアは問題児だった。

「カルミア、このページを書き写すように言ったはずですよ？」

「書き写したぞ。ただし終わりから始めに向けて、真逆にな」

「……前回のテスト、全問不正解だったぞ」

「馬鹿者。よく見てみる。順番を入れ替えれば全問正解だ」

「……こら、居眠りするな！　しゃきつとしろ！」

「乙女の身体に触れるな！　せんせーのスケベ！」

——二週間も経つ頃には、俺は常に青筋を立てるほどにイライラを募らせていた。

カルミアは飲み込みも早く、勉強もよくできた。

だが、あまりに態度が悪すぎる。

勉強さえしておけばあとはどうでもいいという生徒が、俺はもともと許せない。

そして極めつきはコレだ。

「なあ、カード遊びでもしないか？ 勉強は自分で進めておくから」
言っではいけないことをカルミアは言った。

「——俺は遊び相手じゃない」

「もっと楽にだな——」

「俺は先生だ！」

「ひゃあっ!? ど、どうした？ 落ち着——おい、何を……」

俺はカルミアを引き立たせ、床へ這いつくばらせた。

「無礼者！ 魔王様にこんな——」

ぱちいんっ！

「ひいっ」

勢いよく、小さなお尻をひっぱたく。

「痛いっ！ やめんか！」

「これはオシオキだ！」

ぱちいんっ！

「んひゃあっ！」

「日本では悪い子にはこうするんだ！」

ぱちいんっ！

「ぼ、暴力はやめろっ！」

「違う、これは躰だ！」

ぱちいんっ！

「お尻叩きと言って——」

ぱちいんっ！

「伝統的なジャパニーズ・オシオキなんだよ！」

「やだっ、オシオキやだあっ！」

「反省したかっ？」

ぱちいんっ！

「した！ 反省した！」

「だったら言うことは！」

ぱちいんっ！

「ご、ごめっ……」

「聞こえん！」

ぱちいんっ！

「ふひやあああっ！」

「大きな声で！」

ぱちいんっ！

「ごめっ、ごめんなひやいっ！」

ぱちんっ！

俺は手を止めた。掌がじんじん痛い。

「はひ……ひうう……」

カルミアは小さな身体を震わせ、肩で息をしている。

「ごめんなしゃい……せんせー、許して……」

「よしよし、ちゃんと謝れたな。いい子だ」

すっかりしおらしくなったかわいいい生徒の頭を、俺は優しく撫でてやった。

4 イキすぎた教育的指導

「うう……」

カルミアは床に這いつくばったまま、顔を伏せていつまでも動こうとしな
い。

「ほら、もういいから。起きなさい」

「無理……動けない……」

（しまった、やりすぎたか？）

我を忘れて加減ができていなかったのかもしれない。

「す、すまん。痛むのか？」

「じんじんする……ちょっと見てくれないか？」

カルミアは片手でスカートの裾をぺろりとめくり上げた。白い下着に包まれた小ぶりなお尻があらわになる。

「え？ お、おい——」

「どうだ？ 腫れてないか？」

「か、カルミア、お尻をしまいなさい！」

「ほら、どうなんだ？ せんせーのせいなんだぞ。ちゃんと確かめろ」

ふりふりとお尻を振り立ててみせる。

「それとも何か？ 私の尻を見て興奮でもしてしまっただか？」

「なっ——」

「そうかそうか。とんだ変態教師だな。オシオキとは名ばかりで——」

「反省が足りないようだな！」

ばちいんっ！

「はううんっ！」

「怒られているのに！」

ばちんっ！

「あうっ」

「先生を侮辱するとは！」

ぱちんっ！

「ああんっ」

「いい度胸じゃないか！」

ぱちんっ！

「あああんっ♡」

……ん？

なんだか声色が艶っぽくなくてないか……？

「だめ……じんじんするの止まらにゃい……」

いっそもう恍惚といつてもいい表情である。

(まさかとは思うが、カルミアのヤツ——んっ？ こっ、これは!?)

ちらりとカルミアのお尻に目をやって、心臓が跳ね上がった。

秘所にぴっちり張りついた真っ白な下着の底——。

恥ずかしい亀裂に食い込み気味になったそこに、大きなしみができていた。

(間違いない。この子はお尻を叩かれて……か、感じてるんだ)

「ほらほらあっ……もうおしまいかあ？ ぜ、全然効かんぞ？」

露骨な挑発に、どくんと股間が脈打った。

これから先は製品版でお楽しみください♡